



気軽に手を伸ばせば本がある「街かどCafé」（本文中に関連記事があります）

目次／contents

人・まち・地域…………… 2

- ・ 保育園、幼稚園が続々竣工／山崎博央・三浦健史
- ・ 高野山に現代の「結界」が完成しました／高坂憲治
- ・ 駅とまちづくりについて考える／山本昌彰
- ・ 「成逸学区避難所運営マニュアル」の策定について／石本幸良
- ・ 文化資産・NPO・まちづくり／三輪泰司
- ・ 地域経営に一石を投じる事業仕分け／田口智弘

きんきょう…………… 13

- ・ モノづくりのまちを結ぶ“阪神なんば線”開通／高田剛司
- ・ 音を楽しむカフェライフ・ナイトライフ・イベントのススメ
／絹原一寛
- ・ 鳥たちに耳をすませ、目を凝らして／廣部出
- ・ 新人紹介／岡崎まり・橋本晋輔・柳井正義
- ・ 「地域のチカラ～夢を語り合い、実践する人びと～」を出版しました
／杉原五郎

メディア・ウォッチ…………… 19

- ・ 「イノベーションの達人！」／中塚一

まちかど…………… 20

- ・ 街かどCaféで、「ゆったり、読書。」／中塚一



ひと・まち・地域

京都事務所／山崎博央・三浦健史
保育園、幼稚園が続々竣工



安朱保育園：外観南西面

アルパックではこれまで数多くの保育所に関わってきています。このうち設計、監理等でお手伝いしてきた保育所・幼稚園で最近完成した、4つの園をご紹介します。いろいろなタイプがありますが、保育方針の違いなどがあっても、子どもの生活のための建物であるという点は共通しています。

■まちなかの限られた敷地の有効利用 安朱保育園（京都市山科区）

山科の駅から徒歩1分、旧三条通に面したお寺の境内に楽しそうに遊ぶ子どもたち。京都ではお寺の保育園がたくさんありますが、こちらのも一つ。昨年3月に竣工した「安朱保育園」は「やさしい心を育てる保育」を理念とした定員120名の保育園です。建替えにあたっては、紆余曲折があり、足掛け7年の歳月をかけて完成しました。

園舎は鉄筋コンクリート造、地上3階建てで、「明るく気持ちのよい保育園」となるよう計画しました。0、1歳児の部屋は、年齢ごとの2ゾーンにゆるやかに区分し、それぞれの発達の段階に応じた居場所を選べるように配慮しました。2～5歳児の部屋は、一部に異年齢保育ができるように間仕切りを開放すれば大部屋にできるようにしています。

遊戯室は、園庭に面して配し、イベント時などは外部空間と一体的に広々と利用できます。

また「毎日がんばっている保育士に…」という園長の思いを受け、保育士室は山並みの見晴らしが良い一角にサロンのような雰囲気のできました。最高に気持ちのよい空間のはずです。



安朱保育園：1階遊戯室

2階の廊下は、建物の端から端までまっすぐに延びて印象的です。卒園児が大きくなって思い浮かべるのは、案外こういう場所なのかも知れません。

■都市型保育所の敷地内建替え 共栄保育園（京都市南区）

旧園舎の老朽化により敷地内建替えをしました。共栄保育園では旧園舎でも異年齢保育、コーナー遊びなどを取り入れていましたが、新園舎ではより大規模に行うことを想定して園舎全体がワンルームに近い構成となり、既存の保育園の概念とは異なったかたちとなっています。園の保育と新園舎での工夫をご紹介します。

生活の中心 吹き抜け大ホール

共栄保育園では1階に大きな吹き抜けホールを作り、そこで食事とお昼寝ができます。

昼時になるとホールに面する調理室からおいしそうなおいが漂ってきます。調理室前のカウンタースペースは、子どもたちが調理実習をする場合を考慮して高さを低く設定し、流しも設けました。

午後にはたくさんのお布団が敷かれてお昼寝します。天井が高いと寝つけないかも、との完成前の心配をよそに、子どもたちはよく寝ています。実は高い天井でのお昼寝は結構気持ちいいみたいです。

光あふれる園舎

節電にいいのはもちろんのこと、なんと言ってもやはり気持ちいい、自然光にあふれる園舎にしたいと思って、吹き抜けに大きな窓を採りました。大きな開口部があると暑い寒いなど不便もありますが、風の通



共栄保育園：全景



共栄保育園：吹き抜けのホールでお昼寝中

りを考え、床暖房を導入することで対応しました。

柔軟な保育に対応できる間仕切り

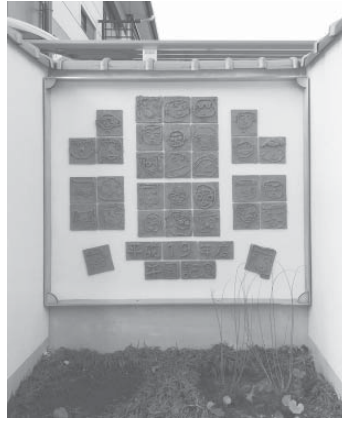
3～5歳児が10人前後で1つのグループとなり、全部で3グループをつくって異年齢保育を行っています。異年齢保育の良い点として、頼り頼られる自覚の芽生えや多様な関係の中での生活による成長などが挙げられます。

以前は片側廊下に「保育室」が面する構成でしたが、新園舎では2階を壁で区切らず、屏風のような可動壁で現在は3ゾーンくらいにゆるやかに分けられており、変化する保育のかたちに合わせて仕切り方を変えられるようにしました。

なお、制作や音楽などでは、年齢別保育もされています。

コーナー遊びのためのしつらえ

2階のワンルーム保育室はコーナー遊びのスペースとなっています。いろいろな遊びのコーナーが工夫して作られています。特にお昼寝の後はここから

共栄保育園：写真上 家具類で各種コーナーが作られています
写真下 園庭の一部

共栄保育園：改築中に卒園した園児たちが作ったレリーフ

子どもたちの遊び声が聞こえてきます。引越しまではただの空間だったのが遊びのコーナーが作られてから急に生き活きとしたのが印象的でした。

外あそびの空間 園庭・屋上広場

園庭は、多様な樹木を植えて季節の変化を楽しむことができる庭としました。木々がこの先成長して、緑あふれる園庭となるのが願いです。一方、走り回ったり運動をするのに、屋上に人工芝を敷いた広場を設けました。

子どもたちにとってかけがえのない場所へ…

保育所は子どもたちが本当に大事なある期間を過ごす場所です。にもかかわらず、平成20年3月の卒園児の皆さんは、工事中の不便を経験しながらも、新園舎での生活がかないませんでした。せめてもの記念として、この子どもたちが作った自分の顔のレリーフを塀に飾りました。この園舎・園庭が、今後ここで育つ子どもたちにとってかけがえのない場所となっていくことを祈っています。

■公設公営の幼保一体型複合施設整備 丹後子ども園（京丹後市丹後町間人）

丹後子ども園は、平成18年に間人地区で発生した大規模な土砂災害により間人保育所が危険となり、市内保育所の統合を合わせ、さらに幼稚園を併設して整備されたものです。定員は保育所120名、幼稚園60名の合計180名、さらに地域の子育て支援室を設けた幼保一体の複合施設です。

建物の特徴としては、L型平面による明快なゾーニング、ハイサイドライトによる明るい保育室、多



丹後子ども園：全景



丹後こども園：保育室



牛ヶ瀬保育園：保育室

目的に使う広廊下、園舎と園庭の有機的な関係を重視した点が挙げられます。

広い敷地を活かして平屋建てとしており、どの保育室からも園庭が近くなっています。

丹後町間人は間人ガニで有名ですが、当地は山ひとつ隔てて日本海という場所です。冬季は北西からの強い風が吹くので北と西はペアガラスとし、また海に近いので塩害対策を行うなど、地域の特性を踏まえた多くの工夫をしています。

特に気に入っているのは明るい保育室です。冬季、表情のある塗り壁を照らして入る日光がとても気持ちいいです。

4月から子どもたちが元気に通い始めています。地元でも待望されていた建物で、長く愛されてほしいと願っています。

■増員に伴う園舎増築 牛ヶ瀬保育園（京都市西京区）

桂川に程近い牛ヶ瀬保育園では、定員を60名から90名に増員するに当たり、園舎を一部解体し、増築を行いました。

増築の特徴としては、お寺の境内なのでお寺への圧迫感を極力少なくしてお寺や既存部分との外観上の調和を図った点、保育室・ホールについては明るく気持ちのよい空間とした点などが挙げられます。

元々は保育室が全部で4部屋でしたが、増員に伴い保育室を増やし、0～5歳で各年齢児についてそれぞれ1室ずつ確保しました。

定員を増やすということは先生も増えるというこ

とで、先生の更衣室や休憩室についても新たに確保しました。よい保育のためには、そこで働く先生も安心して働ける環境を作ることでありと改めて感じています。

工事中の建物内の区画壁は通常殺風景ですが、今回は大きなキャンパスとなりました。工事中の不便を少しでも和らげる試みは大成功。ただ完成時の解体は心苦しかったものです。

増築はいろいろ難しいですが、完成後訪れずでに増築したところが馴染んでいるのを見ると、苦勞が報われたように思います。

■おわりに

子どもを生み育てる新世帯の住まい方の動きに合わせて、保育等のニーズは小地域単位で遷移することが多くなります。そのため、保育所の統廃合や新設などは今後とも多様な展開をみせると思われます。

廣部とともにお手伝いしている京都府精華町では、一昨年度及び昨年度に「第二次保育所づくり構想」「精華町立ほうその保育所建設基本計画」が策定されました。そこで描いている新しい保育所は「子育て世帯が地域社会になじむこと」「町内保育水準の平準化」「保護者・地域のネットワーク」を総合的に支援する核となるものとしています。今後の具体化段階に期待が高まるところです。

これからも、子どもたちが園舎でのびのびと遊び、学ぶことができる生活の場の創造に関わることができる機会を楽しみにしています。



牛ヶ瀬保育園：全景



牛ヶ瀬保育園：工事区画壁の作品

高野山に現代の
「結界」が完成しました
高野山駅・極楽橋駅バリア
フリー化

大阪事務所／高坂 憲治



駅舎より臨むエレベーター棟と渡り廊下

ニューズレター vol.143でもご紹介しましたが、高野町では交通バリアフリー基本構想を平成18年12月20日交通バリアフリー新法施行と同時に策定し、第1号と認定され、その後南海電鉄によりケーブルカーの極楽橋駅に車いす用段差解消機や多機能トイレの設置、高野山駅にはエレベーターや多機能トイレの設置などのバリアフリー化事業が進められてきました。

3月30日にはこれらの施設の完成お披露目が行われ、地元関係者の他、基本構想策定委員会の委員長をお願いした和歌山大学の足立啓先生はじめ、地域外利用者として大阪から高野山までのルート及び高野山内での調査に参加していただいた車いす利用等の方々も招かれ、早速エレベーターや段差解消機の使い心地をチェックしました。

ケーブルカーの駅の段差解消には様々な難問があり、加えて険しい山中の駅のため、難工事となりましたが、関係者の皆様の努力の結果、ようやく完成にこぎ着けることができました。

エレベーター棟と改札口までの渡り廊下はアルパックがデザイン監修をさせていただきました。

私達はまず高野山における「駅」の意味を検討しました。高野山は信仰の山として1200年以上にわたり人々が気軽に近づくことを拒んできました。その結果、山上には独特の領域感をもった宗教空間が形成され、人々の畏怖の対象となってきました。高野山駅は、この山上都市、宗教都市への門としての意味もっています。人々を永く拒み、現代でも高齢者や障がい者が容易に近づけない急傾斜の山を、ケーブルカーによる橋渡しにより、ようやくたどり

着くことができる山上の入り口が高野山駅であるからです。かつて「山規」による女人禁制の時代に、それぞれの参詣道を登った山内の入り口に「女人堂」が設けられ、そこが聖地との「結界」となったように、高野山駅も山上と下界の「結界」になっています。宗教上の「結界」と異なるのは、「結界」が「区別」する「境」であるのに対して、「駅」は「つなぐ」ための「門」であることです。

こうしたことをふまえ、エレベーター棟とそれに続く渡り廊下は、人々を高野山に迎え、そして送る象徴としてのデザインに配慮しました。ここでの象徴性はある種の「神秘性」と「荘厳さ」そして「懐かしさ」によって構成しています。また象徴性は、有形文化財に登録された高野山駅舎のデザインとも関連性をもっています。金剛峯寺のご厚意により渡り廊下の内装には高野町産の桧を使わせていただきました。渡り廊下からは眼下に紀ノ川に沿って橋本市を臨むことができます。

南海電鉄では、橋本から極楽橋の間を下界から山上への結節空間ととらえ、「こうや花鉄道プロジェクト」を展開しています。沿線や駅に花の植栽を行い、旅する人を誘います。この7月からは、橋本駅から高野山駅までを走る観光列車「天空」が運行開始となります。この列車には、線路の北側・西側に広がる紀の川・不動谷川や険しい山間の風景を見渡すことができる「ワンビュー座席」や、4人掛けの「コンパートメント座席」などが設けられています。

この夏は一層優しくなった高野山へ列車の旅に出かけてみてはいかがでしょうか。



極楽橋駅の段差解消機



結界をイメージしたエレベーター棟



高野桧を使った渡り廊下内



駅とまちづくりについて
考える
(日向駅と徳山駅を事例に)
大阪事務所／山本 昌彰

「駅とまちづくり」

冒頭のタイトルと同名の書籍があります（インターシティ研究会編著）。この冒頭で「駅は不思議な空間である。…駅にはまちの色・まちの雰囲気をはらりと塗りかえてしまうほどの大きな力がある。」というように書かれています。

私も、職業上、「〇〇駅周辺まちづくり…」という業務に関わることが多いのですが、今回、仕事を通じて、駅のあり方が周辺まちづくりの形成に大きく関わっている事例に接することができ、あらためてまちづくりにおける駅の重要性を考えさせられました。

駅の存在

「駅ビル」「駅舎」「無人駅」…「駅」といっても、全国には様々なタイプがあり、都市の顔となる大規模な駅ビルと一体となった「駅」もあれば、駅ビルから核店舗等が撤退してしまい、駅前周辺ひいては中心市街地の空洞化が大きな問題になっている「駅」もあります。また、規模は小さくても、地域活性の拠点として、大きな役割を担っている「駅」もあります。

駅の役割は駅ビルや駅舎だけでなく、自由通路や駅前広場といった駅を取り巻く様々な施設の整備が極めて重要となりますが、地域の特色を反映した駅づくりは、ハード面だけでなく、地域と一体となって行われるものが多く、駅そのものの存在がまち

づくりに大きな影響力を及ぼしているものがあります。そんな事例として最近私が業務で関わった2つの駅を取りあげて考えてみましょう。

市民のまちづくり活動と駅舎デザイン

まず、宮崎県「JR日向駅」で、駅舎と周辺まちづくりの関わりについて日向市とそのまちづくり団体にヒアリングする機会がありました。日向駅は人口6万人と決して大きいとはいえない都市の中心駅ですが、まず、全面ガラス張りホーム全体を覆う大屋根形式の立派なデザインが目立ちます。しかし、ここではデザインばかりでなく、駅や駅前広場を中心に、地元と行政・専門家が検討段階から「デザイン会議」を立ち上げ、併せて、まちぐるみでまちづくり活動を進めています。例えば、地元では、活動団体が中心となって、自分達でまちに対して活動をおこなっていくことを常に心がけており、駅前ロータリーの花壇についても、苗などを小学校から調達するなどして自分達で整備しています。また、将来のまちを担う子どもたちにも「自分たちのまち」に対する愛着心を育ててほしいとして、小中学生ボランティアにより「こどもまち育て隊」を結成し、駅前だけでなくまちの清掃美化活動などにも取り組んでいます。

まさに、駅づくりをきっかけにして、まち全体が再度まとまることができ、衰退しかけていた都市を見事に再生させているのです。



新しく整備された日向駅



駅前花壇づくり



イベントポスター

駅という空間は単なる交通の結節点だけでなく、地域活性の拠点としても大きな影響力をもつものだとことを実例によって実感できました。こうして考えると、この駅舎の「大屋根」が、まるで「市民一人一人の力をそのままデザインに表すところなる」といったような感じにも見えてくるから不思議です。

「ハレ」と「ケ」～ここでしかできないこと

次に、まだ計画段階の事例ですが、私が業務で関係しました山口県「JR徳山駅」です。ここは、駅ビル整備をきっかけに、行政が主体となって中心市街地活性化に取り組むなど、都市全体の活性化を目指しています。

少し古い言い方もかもしれませんが、駅及び駅前には「ハレ」と「ケ」が必要といわれます。徳山駅では、まず、その「ハレ」をどう再生していくかで、そのために、市では市民ワークショップ等によって市民からのアイデアを取り入れたり、市長の諮問機関「周南再生戦略会議」を中心として「徳山駅ビル及び周辺グランドデザイン」を策定し、駅ビルを『待ちわびた周南の新しいドア』と称して、駅ビルを都市活性化の目玉事業に位置づけたりしています。

こうした背景の中、現在では、日向駅と同様、「デザイン会議」を立ち上げて新しい徳山駅ビルの整備を検討しており、先日はその一環である「徳山駅周



徳山駅新幹線ホームから港を望む

辺まちづくりシンポジウム」(市主催、コーディネーター篠原修・政策研究大学大学院教授)が開催されました。ここで印象的だったのが、「周南でできることで大都市(広島)にできないことがある」(内藤廣・東京大学大学院教授)ということ。徳山駅には、自然(海、山)が新幹線駅に近接し、現駅ビル内にある市民交流センターを拠点としたまちづくり活動が活発であるなど、市民の意識も駅を中心にうまくまとまっています。すなわち、既に「ケ」の素地が充分にあるといえ、徳山駅では、「ハレ」だけでなく、こうした「ケ」の部分の素地をどう活かしていくかがポイントかなと感じました。

あとがき

駅は、駅ごとに各々異なった「歴史」をもち、そこに活動する市民一人一人の異なった思いや“生き様”を背負っています。「駅舎のデザイン」とは、単に専門家や関係者が決めているのではなく、こうした市民一人一人の活動や思いが必然的に「形」になっていくものといえるのかも知れません。



徳山駅ビルを考える市民ワークショップ



徳山駅周辺まちづくりシンポジウム



「成逸学区避難所運営マニュアル」の策定について

京都事務所／石本 幸良

成逸学区は京都市上京区の西陣北部に位置し、堀川通に面した1200世帯あまりの小さな学区です。平成19～20年度に自主防災会と成逸まちづくり推進委員会を中心に学習を重ね、住民主体で「避難所運営マニュアル」を策定しました。このマニュアル策定を紹介した記事（京都新聞4月12日朝刊）が掲載されて、各方面から多くの問い合わせを頂いていますので、その取組経緯と内容を報告します。

成逸学区の自治組織とその活動の特色

成逸学区では昭和48年に、町内会26ヶ町と各種団体約20団体でボランティアの住民自治福祉活動団体「住民福祉協議会」を結成し、自治活動を展開しています。市内の多くの自治連合会は町内会の集まりと市、区、学区の3層構造の各種団体、社会福祉協議会等の関係によって多様な形態があります。成逸学区は住民福祉協議会が各種団体の活動も含む自治活動の事業計画を総括し、町内会費等の分担金をもとにすべての事業予算を執行しています。

住民福祉協議会は、概ね月1回の町内会長、各種団体代表および住協本部役員による評議員会ですべての活動を協議、報告の上、実施しています。すでに紹介をしています新築マンションの町内会加入について「せいいつ方式」を決定し運用が可能なことも、この組織形態であることが前提となっています。

マニュアル策定の取組の経緯

成逸自主防災会では近年多発する地震による大災害が我が町で実際に起きたときへの不安、そしてその後には必ず発生する、テレビでしか知ることのできない避難所生活に対する不安が話題となっていました。自主防災会では上京消防署と合同で避難所についての学習会を平成19年度から開催しました。

平成20年度には、国土交通省の「200年住まい・

まちづくり担い手事業」に応募し、「NPO法人都心界隈まちづくりネット」と、「あんしん・あんぜん上鳥羽推進委員会」の協働の取組が選定され、成逸の取組では「避難所運営マニュアル策定」を柱の一つとしました。

マニュアル策定に向けての取組の概要

成逸の取組は、成逸自主防災会と成逸まちづくり推進委員会に私の石本ゼミが支援の形で参画し学習会を重ねました。

最初に報告書等では伝わらない経験者の生々しい情景を聞くために、阪神・淡路大震災で罹災し、自らが避難所を開設して運営にたずさわった西宮の高砂晴美さんの経験談をもとに、避難所で発生する様々な課題を体験しました。また、関西学院大学の室崎益輝教授に学習会の講師をお願いして、生々しい現場情報の確認と通常時に地域で確認すべき内容について学習を行いました。

避難所マニュアルはネットから多くの事例を入



(図) 避難所運営マニュアル表紙

手することが可能です。しかし、住民の視点に立って、震災に遭遇した時、真にその現場にいるものが理解しつつ進めるマニュアルには巡り会えませんでした。

そこで、先進事例の中でも一般の住民が理解しやすく、納得できる複数の事例を参考書にして一から作ることにしました。実際の現場で「成逸ならどのようなことが問題になるか」を学習会で意見交換しながら作成しました。結果的には参考事例を基本にした成逸版の再構成マニュアルとなりました。マニュアル作成も目的ではありますが、相互確認も大切です。そのため作成のプロセスで、担当者名前や団体名を記入するところに最も時間を割きました。

夜間の防災避難訓練の実施

平成20年10月にマニュアル策定の取組の一環として夜間の防災訓練を実施しました（詳細はニュースレターNo.153号参照）。夜間の防災訓練にも関わらず、約315名もの参加を得ました。夜間の避難の難しさ、避難所の広さの確認、避難所の夜間の状況を参加者が体感しました。参加者のアンケート結果を見ても、上記のことを体感できたことの評価と、日常の近所づきあいの重要性を認識したとの意見が多く出されました。

マニュアルの住民への広報と更新の取組

完成したマニュアルはビニールファイルに入れて保管・引き継ぎができる形式にして、各町内会会長に配布しました。また、成逸まちづくりニュースでマニュアルの概要版を全戸に配布しました。

今回の成逸の取組は、マニュアル策定に向け、多くの住民の多様な参加と参加を通じての問題の共有を図ることが目的でした。マニュアルに記載した避難所での各活動班の役割については、担当の各種団体で今年度シミュレーションを実施して

課題を整理することとしています。今後、毎年の取組でマニュアルを精査するとともに、自主防災委員の交代時にも的確に情報伝達ができる仕組みづくりに努めていきます。

福祉防災マップの改訂

自主防災会では6年前に大災害時や日常の福祉活動を活用目的として町内単位で「福祉防災マップ」を作成していましたが、今回、マニュアル策定と併行して町内会会長から町内の新しい情報を確認してマップの改訂を行いました。マップは個人のプライバシーの問題もあるため、マニュアルと一緒に各町内会会長が保管して緊急時に備えています。

マニュアルについての新聞掲載以降、多くの問い合わせを頂いております。マニュアルの概要版「成逸まちづくりニュース第5号」は成逸住民福祉協議会ホームページ：<http://seiitujukyo.org/>で公開しています。また、全文につきましてはご連絡頂きましたら、ご提供いたします。



(図) 福祉防災マップ



文化資産・NPO
・まちづくり
取締役相談役 三輪泰司
(NPO 平安京・代表理事)

前号でお知らせしました「京都府庁旧本館・春の一般公開」府民協働企画「エコー・ツアー 09」は、7日間で13,311名の来場者を迎えました。

華やぎと感動と

来場1万人目の方には、知事から記念品を贈呈して頂きました。大阪・茨木からのご家族連れでした。山形や鹿児島からも来られていました。桜守・佐野籐右衛門さんも駆けつけ、中庭のしだれ桜に“祇園”と名を付けて下さいました(写真1)。

写真2は正庁でのNPO オペラプラザ京都のオペレッタ「こうもり」のハイライトです。京都でこんな素敵なNPOが活躍されているとは驚きでした。こうしたライブ、パフォーマンス、インスタレーションと次々に繰り広げられて、一番驚いていたのは、105歳になる旧本館だったのではないのでしょうか。

来場者アンケートの分析をして、4月15日、実行スタッフ、舞踏の今貂子さんら出演者、府の職員も加わり、打ち上げと反省会。17日には定例の第8回応援ネット会議で総括と次の計画を議論しました。

春はエンターテインメントをメインに展示しましたが、秋はアートをメインにお琴や野点といったコンセプトです。今秋10月24日から2週間、御所の一般公開とシンクロして「府庁界限まちかどミュージアム」が開かれます。府文化芸術室の主催で、美術館、大学、企業が参加します。

同ミュージアムの開催前にイベント等の準備が着々と進められています。中間には6月7日(日)、前庭も使ってNPO 日本都市農村交流ネットワーク

協会を中心に地産池消・即売「食のマルシェ」を開催します。

府庁周辺のガイド・マップは、近く出来上ります。府有資産活用課は、併行して旧本館「利用の手引き」を策定しました。

「エコー・ツアー 09」の開催後、地域への波及が起こっています。府庁前のお店で聞きましたら、開催中大阪などからのグループが大勢来られ、仕込みを追加する賑わいだったそうです。

応援ネットは、旧議場見学ツアーを始めるべく、補修・復元を視野に置いて、文化財建造物利活用の心得の学習と、資金募金を計画しています。

この活動は“文化財”に絞って「NPOによる文化財建造物活用」から入りましたが、様々な問題が浮かび上がってきました。

空間資源をいかに地域経営に活かすかという原点へ戻り、我がNPO 平安京のホームグラウンドである「西陣」地域に的を絞り実践的探究をはじめました。

文化資産活用の展開

昨年、10月と11月の2回、源氏物語千年紀事業として、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が「紫式部が生きた平安京をめぐるスタンプラリー」を催しました。研究所の要請を受け、6つのNPO・ボランティア団体が、ツアーガイドをお手伝いしました。

研究所の拠点である京都市考古資料館のある西陣地域を主な活動領域にしているNPO・ボランティア団体-じゅらくだい倶楽部、紫式部通り会、NPO 平安京、NPO 京都観光文化を考える会・都草一の有志が発起して今年1月31日に「西陣地域の町づくり協議会」を設立しました。

事業内容は、団体相互の情報交換、考古資料の勉強会、共同イベントの他、地域の文化事業への参画、行政機関との協働事業の開発です。

平成21年度・研究所の考古資料館開館30周年記念事業「京都・秀吉の時代」に合わせて、4月18日の第2回協議会は、「考古学から見た聚楽第」と、じゅらくだい倶楽部の研究報告「聚楽第城下の大名屋敷配置考察」を勉強しました。



写真1：中庭の満開のしだれ桜“祇園”



写真2：オペレッタ「ごもり」のハイライト

この京都市考古資料館も文化財建造物です。「西陣」の中心、千両ヶ辻と言われる今出川大宮の少し東、大正4年（1925年）竣工の元・西陣織物館で、昭和59年（1984年）に京都市登録有形文化財に指定されています（写真3）。

設計は、京都高等工芸学校（現・京都工芸繊維大学）図案科教授・本野精吾です。玄関ポーチや屋根は、一見して様式を踏んでいるように見えますが、本野教授のヨーロッパ留学から帰国後、最初の仕事で、ドイツ工作連盟に参加したペーター・ペーレンスの影響を受けた建築革新運動の旗手らしく、装飾を抑えたモダニズム建築の先駆けのようです。

府庁旧本館との共通点は、旧本館の正庁・議場、こちらでは3階の会議室が儀典機能を持っていた他は、基本的に執務空間で、華麗な宮殿建築の類ではありませんが文化財建造物であって、今も生きて使われていることです。

埋蔵文化財も文化資産

協議会の活動拠点を、その考古資料館に置いていることは、大きな意味があります。

建造物だけでなく、中身の機能ごとと利活用の対象になります。埋蔵文化財も文化資産です。

図1は京都新聞が発掘資料から動物を集めてシリーズにした記事です。まじないの牛や、おもちゃの馬がいます。考古資料の使い方としては本筋ではないかも知れませんが、社会報道部記者のセンスと責任で、地域での庶民の暮らしの息吹を伝えています。お菓子や生活用具もあるでしょう。文化資産には現代に活かすビジネスのヒントが潜んでいます。埋蔵文化財は本来、地域にあるべきものです。

堀川の河川整備

旧本館のイベント中の3月29日、西陣の東限、平安京造営以来、暮らしの中に生きてきた堀川の河川環境整備事業が完成し、通水式典が行われました。

沿川23学区、商店街、ライオンズクラブが参加する「堀川と堀川通を美しくする会」設立は、昭和60年（1985年）4月。地域から建設業界、企業へ輪は拡がり、たいへんな努力がようやく実って、

55年ぶりに水が流れました。快適なプロムナードになった堀川を散策して、二条城付近で西岸を見て頂きますと、石垣に普請を担当した大名の刻印を見つけることが出来ます。美しくする会の「堀川手づくり水車の会」が110ワットの水力発電を実験しています。

地域空間資産は、暮らしを楽しくし、地域経営を豊かにします。それを結び動かす原動力は、やはり奉仕のパッションでしょうか。

5月24日（日）、NPO平安京は、府庁旧本館でシンポジウム「堀川に水が流れた」を開きます。



写真3：西陣織物館当時



図1：出典 京都新聞



ひと・まち・地域

地域経営に一石を投じる
事業仕分け

大阪事務所／田口 智弘

昨年（平成 20 年）私は、滋賀大学事業仕分け研究会（以後「研究会」）のメンバーに加えていただくのみならず、世話人会の末席を汚しながら、関西発の事業仕分け（事業仕分け・地域事業組成）に携わりました。昨年度、研究会の協力の下で事業仕分けを実施した自治体は加西市（構想日本と共同実施）を皮切りに大津市、湖南市、長浜市、亀山市の 5 市で、私はこのうち大津市を除く 4 市に仕分け人・コーディネーターとして参加しました。

事業仕分けとは、構想日本（非営利独立・政策シンクタンク）が提唱したシステムで、構想日本では 2002 年から 38 回（35 自治体、構想日本 HP 調べ）の実績があります。また、地方自治体に限らず、国においても文科省、環境省、財務省、外務省で実施しています。その内容は、自治体の事務事業について、外部評価者が必要性の有無を、そして必要な場合には適切な主体が誰であるかを仕分けていくものです。自治体はその結果を参考に自ら事業を見直し、予算に反映します。平成 17 年度に事業仕分けを導入した滋賀県高島市では既存事業を 21 億円削減（民営化、事業改善含む）しました。これは平成 17 年度の市の普通会計決算額約 300 億円の実に 7% に当たります。事務事業評価がかなり一般化してきましたが、これほど効果をあげた例を私は見たことがありません。合併直後という特殊事情も重なりましたが、財政に与える影響は顕著であるといえます。この点にだけ着目すると、事業仕分けは事業をバツサリ切り捨てる非情の手段と思われがちですが、そうではありません。仕分け人という第三者の目から事業の必要性を評価したうえで、事業実施に当たっての主体や方法を議論し、自治体（市民）が新たな

視座で意志決定をする契機を提供することがその役割だと考えます。本格的な地方自治の時代を迎えるに当たって、旧来の価値観や因習に基づく事業については大ナタを振るう時期にきていると私は考えます。右肩上がりを前提とした計画や構想が過去のものとなった今日、新たな事業やまちづくりの財源のためにはスクラップが非常に重要であることは言うまでもありません。バツサリが仕分けではないと云いつつも、次年度の予算が組めないほど逼迫した今日の財政事情下では、きれい事ではなく、まずは大ナタを振るう必要があるように思います。この点において事業仕分けは自治体経営（その先にある地域経営にも）に一石を投じるのではないかと考えます。

事業仕分けをもう少し詳しくご紹介しますと以下のとおりです。（滋賀大学事業仕分け研究会資料より）

- ①「事業仕分け」は現在の事業を、不要、必要に区分した上で、必要事業について国、県、市町、民間と仕分けします。さらに、新しい「公共」による地域経営をめざすために、市町もしくは民間に仕分けた事業について、地域団体、NPO、民間企業のどの主体が担うことが望ましいか、「地域事業組成」を行います。
- ②これにより、単に行政から事業を切り離すだけでなく、行政に代わって地域ぐるみでサービスを行うしかけづくりが可能になります。
- ③この一連の活動を、「事業仕分け・地域事業組成活動」と呼びます。
- ④行政改革推進法でも、その基本理念の中に「政府及び地方公共団体の事務事業の必要性の有無及び実施主体の在り方について事務事業の内容及び性質に応じた分類、整理等の仕分けを踏まえた検討を行った上で（一部省略）」と、いわゆる「事業仕分け」の導入を促しています。

事業仕分け・地域事業組成活動の流れ



を行った上で（一部省略）」と、いわゆる「事業仕分け」の導入を促しています。（続く。次号では事業仕分けの準備から仕分け当日のプログラム、課題と今後の展望についてご紹介いたします）



モノづくりのまちを結ぶ “阪神なんば線” 開通

大阪事務所／高田 剛司

昨年から今年にかけて、関西では鉄道の新規開通に関する話題が3件ありました。1件目は、昨年3月に開通した「JRおおさか東線」で、大阪・放出（はなてん）駅～久宝寺（きゅうほうじ）駅を結び、東大阪市の西部を縦断する路線。2件目は、昨年10月に開通した「京阪中之島線」で、大阪・天満橋駅～中之島駅までの大阪都心を東西に結ぶ新線です。

そして、今年の3月20日、阪神西大阪線を延伸し、近鉄奈良線と結ばれた阪神なんば線（尼崎駅～大阪難波駅）が新たに開



阪神なんば線開催イベントのちらし



トライ君（東大阪）とアマレンジャー（尼崎）



近鉄布施駅前ではTMO 尼崎等が出店通しました。これにより、有名観光地である神戸と、遷都1300年を来年に控える奈良が直通運転で結ばれ、来訪者の新たな流れによる双方の観光活性化が期待されています。

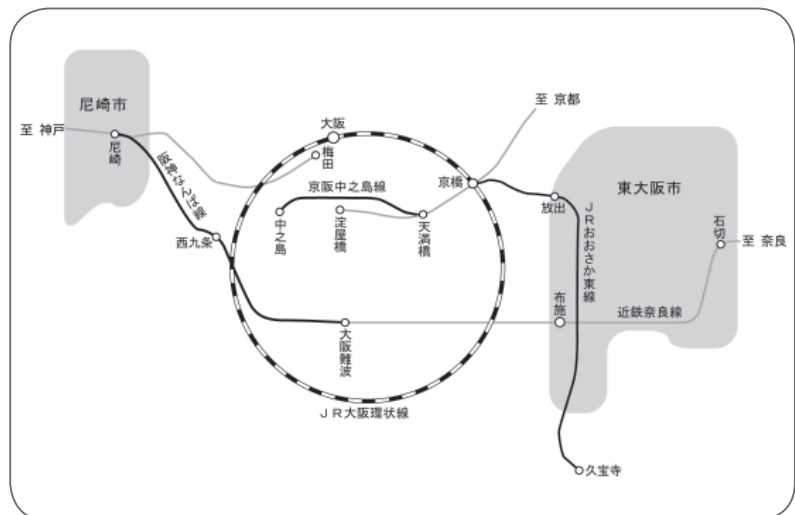
ところで、この路線は、観光地の“神戸”と“奈良”が結ばれたことに注目が集まっていますが、我が国有数のモノづくりのまち、“尼崎”と“東大阪”が結ばれたということも特筆すべき点です。

開通初日は、両市の主要駅である阪神尼崎駅、近鉄布施駅において記念イベント「なんば線でコンニチハ」が行われました。尼崎会場では、東大阪市の名産や逸品の展示販売（東大阪ブランド推進機構、東大阪ラグビーグッズ創生クラブの商品など）、石切参道商店街やスマイル瓢箪山などの東大阪市内商店街のPRコーナーが開設され、多くの尼崎市民が訪れました。一方、東大阪会場では、TMO 尼崎による「メイドイン尼崎」グッズの販売が行われ、こちらは東大阪市民にPRされました。



阪神尼崎駅前では東大阪の商店街組織等が出店アルパックでは、昨年度から東大阪市の新しい商業振興ビジョン策定のお手伝いをしています。その検討メンバーによって、昨秋、TMO 尼崎に視察へ行き、その際、今回の阪神なんば線を記念して、双方の商業、観光等のPRをできないかという話題があがりました。後に、両市の商工会議所や市による実行委員会によって準備が進められ、前述のイベントが実現されました。

今回のイベントを紹介するちらしは、尼崎市と東大阪市の2市を並べて紹介する、これまでにないもので、ややディープで下町的雰囲気醸し出しているデザインやコンセプトはとて面白いがあります。この取り組みがお互いの“まち”を結びつける第一歩になり、商業者や製造者、そして市民も巻き込んで“ひと”の交流が一層広がっていけば、おもしろい組み合わせによるイノベーション（革新）につながるのではないかと期待しています。





きんきょう

音を楽しむカフェライブ・ナイトライブ・イベントのススメ

大阪事務所／絹原 一寛

「音楽」は文字通り「音を楽しむもの」ですが、最近ではその手段はもっぱらポータブルプレイヤーになっています。インターネットを経由して楽曲がダウンロードできるようにもなり、音楽がずいぶん身近なものになったと感じる一方、本当の楽しみはライブなのに……と思うことも多々あります。

私は趣味でトランペットを続けており（主にジャズです）、キャリアはもう10年以上にもなりますが、やはり「音楽に直に触れるライブに勝る楽しみはない」と感じます。とはいえ「一体どういうふうにしんだらいいのか分からない」という方もおられるかもしれませんので、私なりに楽しみ方をご紹介しますと思います。

まずはカフェで気軽にライブを

近年はいろんなカフェができて、若い女性たちが癒しなどを

求めて集まっています。新たな魅力付けや集客の手段としてライブを活用するところも出てきており、アマチュアミュージシャンが気軽にパフォーマンスを披露できる場としても人気を集めつつあるようです。

江坂にある「SADE' S CAFÉ」は、一念発起し脱サラした若いオーナーが始めたカフェです。オーナーがもともと音楽に興味があったそうで、いろんなライブができるミニ・ライブハウスのような使い方をしよう、と機材を買いそろえ、ミュージシャンを集めました。今では毎週末何かしらのライブが開催されるスポットとなっています。

（SADE' S CAFÉ <http://sadescafe.jugem.jp/>）

池田にある「はねつとの森」は、NPO 法人が運営するコミュニティカフェです。平常はボランティアの方が中心となって、有機野菜等を使ったお食事・お菓子等を提供していますが、音楽イベント等も開催されています。先日は琉球民謡のライブがあり、皆さん

大合唱で盛り上がっていました。

（はねつとの森 <http://www.npo-ha.net/>）

こうしたカフェは気楽に行けるところが良いと思いますし、近所でそうした催しをしているカフェを探すのも面白いと思います。SNS サイトでも「カフェライブ」というコミュニティができたりしていますので、のぞいてみてください。

ちょっとおしゃれをして、大人なナイトライブを

夜のライブを楽しむには「衣装もちょっとおしゃれをして、美味しいお酒や料理を楽しみながら」が良いですね。ただ、これどこに行けば良いのか迷うところですので、いくつかご提案したいと思います。

まずは、「Billboard Live 大阪」をお勧めしたいと思います。梅田のハービス ENT の地下にあるライブハウスです。もとはブルーノートというジャズを中心としたライブハウスでしたが、全米ヒットチャートで知られる米音楽誌ビルボードの刊行会社と提携して、洋楽・ポップスも広く取り扱うライブハウスへと生まれ変わりました。ちょっとお金は奮発しなければなりませんが、ハコ（ステージの雰囲気やライブハウスの設備等）が大変素晴らしく、ステージと客席との距離も近いので、入門編としてライブの良さに触れるには一番良いのではないかと思います。



はねつとの森



Billboard Live 大阪

(Billboard Live <http://www.billboard-live.com/>)

続いて、大阪の老舗ジャズライブハウスを2つご紹介します。梅田、兎我野町にある「ロイヤルホース」は、毎晩プロミュージシャンが熱いライブを繰り返すライブハウスです。席数も多くバーカウンターもあるので、友人同士で会話を楽しみながらライブを聴くことも可能ですし、1人でふらっと立ち寄っても大丈夫です。どちらかといえばモダンなジャズが中心の構成となっています。

(ロイヤルホース <http://www.royal-horse.jp/>)

また、同じく梅田、お初天神通りにある「ニューサントリー5」は、古い(20~40年代くらい)ディキシー系のジャズが中心のお店。毎週土曜日演奏のニューオリンズ・ラスカルズは世界的にも有名なニューオリンズ・ジャズを聴かせるグループで、人生の大先輩のおっちゃんたちの深みのあるジャズが聴けます。

(ニューサントリー5 <http://www.mmjp.or.jp/live-info/shop/ns5.html>)

だいたい、ミュージックチャ

ージ(入場料みたいなもの)+ドリンク・フードにサービス料(10%くらい)という構成です。居酒屋よりは割高になりますので、頻繁に出かけるわけにはいきませんが、デートや記念日などの選択肢の一つに加えてみてはどうでしょうか。

まちを舞台とした音楽イベントに参加する

さらに、最近ではまちを舞台にした音楽イベントも広がってきました。その1つ、高槻ジャズストリートをご紹介します。

毎年ゴールデンウィークの2日間に開催されており、今年で11回目を迎えました。阪急高槻市駅・JR高槻駅を中心に全39会場、全て入場無料で、ジャンルも限定せず、老若男女、学生・アマチュアからトッププロのライブが垣根無く自由に楽しめるという素晴らしいイベントです。今年も大変な人出でにぎわいました。私も以前出演しましたが、これほど暖かいお客さんが集まり、ミュージシャンにとっても楽しいイベントは他にないと思いました。全てが市民ボランティアによる運営で、苦勞を乗り越え、知恵や工夫を積み重ねながら、ここ

までの大きなイベントに育てられました。今年は不況の影響で広告費等が減少し、厳しい運営になったと聞いています。来年以降も継続できるようにと強く願う次第です。

(高槻ジャズストリート <http://www.0726.info/>)

ライブに触れて文化を盛り上げよう

ニューヨークを訪れた時に感じましたが、あちらは本場ということもあってナイトライブが大変充実しており、イベントの開始時間も遅く(PM9~10時くらいからスタート)、12時をまわってもたくさんの人であふれていました。

文化が衰退しているという声を聞きますが、私たちはともすればその担い手に責任を押しつけがちです。しかし、そういう楽しみを知る、たしなみをする人が減ってきたことが大きな原因ではないかと思います。

イヤホンからの音楽では決して得ることのできない楽しみがありますので、まずは身近なライブから探して、トライし、文化の担い手に加わっていただければと思います。



ロイヤルホース



ニューサントリー5



高槻ジャズストリート



きんきょう

鳥たちに耳をすませ、
目を凝らして

京都事務所／廣部 出

日常生活で見る鳥といえば、スズメ、ドバト、キジバト、ハシブトカラス、ハシボソカラス、トビくらいでしょうか。実はこの冬、はじめて鳥に注目して過ごしてみました。

庭木にヘンな鳥がやってきた！

きっかけは、庭に見慣れない鳥がやってきたこと。調べてみたら、ジョウビタキのオスでした。ハナミズキの赤い実を食べにきてたんですね。知らない間に実を食べている主犯でしょうか。そして、みかんやバードケーキ（小麦粉+ラード+砂糖を捏ねたもの）なんかを置いてみたところ、メジロとヒヨドリが常連さんになり。ヒヨドリは喧しいですが、殺風景な冬の庭に、ちょっとしたお客さんが嬉しいです。

即席バードウォッチャーに変身！

そんなこんなで熱しやすく冷めやすい私はイソイソと向かいました、ご近所ナチュラルパークの御所と鴨川。とりあえず写真に撮る、それをネットで調べる。撮影&同定できたものだけでも、ほんの何日かで約40種類です。普段意識していないだけで身近



ルリビタキ 上：メス、下：オス

にいるものですね。小さい鳥たちを発見するコツは、耳。落ち葉をガサゴソする音や、さえずり、羽ばたきなんかの音を頼りに、気配を探り、目を凝らします。見つけたら、望遠レンズや双眼鏡などでドーズ。

溪流の宝石が御所でダイブ！

妖怪鶴も出現！

一般的に、ほほおとなりそうなところで挙げると、筆頭はやっぱりカワセミ。御所の池でしばらく待てば、ダイブを見ることができます。チーっと甲高い声をあげてやってきて池の上の枝にとまり、しばらく間をとって、じょぶん。待てない人は、辺りにカメラ腕自慢のオジサンたちが超望遠レンズを並べて待ち構えたりしてるので、写真&自慢話をゲットしてください。他に植物園などにもいるそうです。それからコゲラ。高いところにいることが多いですが、時には間近にみることも。キツキですから、キツツキます。小さい体の鳥なのに、その音と振動は大きな木の全体に響いて、こちらの体まで届きます。鶴と呼ばれて、夜の不気味な鳴き声が恐れられたというトラツグミにも運良く出会えました。他にも、頑丈な嘴でタネを割るシメ、パンクな頭のアオジ、やや高所



スズメ

から睨んできたモズ、まだ拙いさえずりのウグイスなどを、“気配”を察知してパシャリ。

バードバスもあり

それほど頑張らなくても、イカルにアトリなど派手に群れていればすぐ見つかりますし、据えられ守られている小鳥の水場では、いろんな種類の鳥たちを見ることができます。人慣れしてほんの側までくるシジュウカラ、おみくじ配達で有名なヤマガラ、青い羽がきれいなルリビタキ。コイツは、雌雄でオシャレなペア柄をキメています。落ち葉と一体化してモゴモゴ団体行動のビソクイ、ちょっと行動が怪しいシロハラ、くるくると忙しいエナガ、すばしっこいセンダイムシクイなどなど。チッチと鳴いて、バシャバシャ、ブルブル。

鴨川にだってイロイロおり

鴨川では、まずは水鳥。見慣れた鳥ですが、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモなどのカモ、アヒル、アオサギ、コサギ、チュウダイサギなどサギたち。目ン玉緑の潜水夫、カワウ……。中州などをよくみれば、ツグミ、ムクドリ、イソシギ、セグロセキレイ、ハクセキレイ……。冬の京都の風物詩ユリカモメは減っているようで、どうにも目にした記憶がありません。



コゲラ



アオサギ

青葉の頃は……

この原稿の執筆時、既にツバメも子育てを始めており、発行時ともなると季節はすっかり初夏に向かいます。木々の葉もますます茂って樹上の小鳥を探すの



ビンズイ

は大変そうです。でも、鳥たちのキャストも大幅に入れ替わりますし、居残り組にしても、スリムになったり羽を替えたりで、すっかり様子が変わっているはず。猛暑の時期までは楽しめる

でしょう。とりあえずの狙い目は青葉の頃にやってくるフクロウ、アオバズク。例年、御所で子育てをするそうですので、ちょっと見に行ってきます！

新・人 紹・介



「まちを見る」

大阪事務所／岡崎まり

4月1日より大阪事務所に入社しました岡崎まりです。大学時代に参加した国内外の調査を通じて、街路空間を歩いているだけでもその土地に住む人々の営みが垣間見えるような、又息遣いが聞こえてくるような街に魅力を感じてきました。それはその地域に住む人々が住居だけでなくその土地に住まうことをも楽しんでいることが伝わってくるからです。

社会人としての新たなスタートをきりましたが、まずはフットワークを軽く、多くのまちを見て多くの人に出会いたいと思います。そしてそれぞれの街が持つ魅力や問題点がどこにあるのかを読み解き、何をすべきかを見極める力を養っていきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。



「学生生活で得たこと」

大阪事務所／橋本晋輔

この4月に大阪事務所に入社しました橋本晋輔です。大学時代は都市交通計画を学んできました。

実は私、元々は中心市街地の活性化に興味があり進学したのですが、大学ではなぜか「交通」という一見関係のないテーマが与えられ取り組むことになりました。最初はその意図がよく分からなかったのですが、学んでいくうちに中心市街地衰退のようなまちの変化に対して、人々の交通行動の変化が大きな影響を

及ぼしていることを知り、まちの問題を解決していくには様々な角度からの視点・取組が必要であることを感じました。

まだ、そのような多角的に見る力はありませんが、これから色々なことに挑戦し、いつか地域がよりよくなるためのお手伝い出来るようになればと思っています。皆様のご指導よろしくお願い致します。



「雪の札幌から桜の大阪へ引越し」

大阪事務所／柳井正義

4月20日から大阪事務所にて総務職として勤務しています。前職は札幌の地方シンクタンクで調査と経営コンサルティング（中小企業診断士の資格保有）をやっていました。

生まれ育ちは東京横浜で、札幌には所謂Iターンで移り住みました。その前に名古屋に住んでいたこともあります。関西で暮らすのは今回が初めてです。歴史、文化、町並み、食べ物など関西ならではの魅力と

の出会いが楽しみです。

まずは地名を早く覚えたいですね。北海道で暮らし始めたときも最初は耳慣れない地名にとまどいましたが、関西方面でも読みが難しかったり同名や紛らわしい市町村名が結構あると感じています。アルパックのお客様は地方自治体をはじめ地名がついていることが多いので、仕事上でも要注意です。

どうぞよろしく願いいたします。





きんきょう

「地域のチカラ～夢を語り合い、実践する人びと～」を出版しました

代表取締役社長／杉原五郎

やっと出版できました

昨年の5月から、アルパックの有志に呼びかけて出版企画を進めてきましたが、このたび、アルパックの中堅所員を中心とする8名の共同執筆により、「地域のチカラ～夢を語り合い、実践する人びと～」の書名で出版することができました。

10回を超える企画編集会議などを経てほぼ1年がかりの取り組みの末、やっとゴールにたどり着きました。いろいろな困難を乗り越えて出版にこぎつけるには、編集者である長尾敏明さん（自治体研究社）の的確な助言と温かい励ましがありました。また、表紙や中扉のデザインについては、仕事で長年深いお付き合いをしている鳥山大樹さん（バード・デザインハウス）から斬新で魅力的な提案をいただきました。

地域の「元気促進剤」がここにある！

本書の帯のコピーは、地域の「元気促進剤」がここにある！人と人をつなぎ、思いを束ね、まちづくりを応援する専門家たちの「汗と涙と感動」の奮闘記、となりました。地域をなんとかしたい、なんとかならないかと考えている、住民や市民活動団体、自治体関係者（首長、議員、職員）、大学や教育関係者、中小企業経営者、都市計画やまちづくりの専門家など、できる限り

多くの方々に読んでいただきたいと考えています。

地域を動かし、地域を元気にする力

昨年秋に勃発した米国発の金融危機は、地球的規模で景気の大規模な後退を引き起こしています。GMやトヨタなど自動車産業を直撃し、国や地域の経済の土台を大きく揺さぶっています。日本の地域は、こうした大波を受け、地域産業の衰退、地域格差の拡大に拍車がかかり、「地域崩壊」とも言うべき危機に直面する地域も出てきました。

今回出版した本は、衰退と崩壊の危機にある地域をなんとかしたいと頑張っている住民や自治体関係者などに向けてエールを送るとともに、「地域を動かすとはどういうことか」「地域を元気にするにはどうしたらいいのか」について執筆者それぞれの思いを伝えることに心を砕きました。

本書の構成

本書は、7つの実践報告と終章で構成しています。

- 第1章：まちづくりワークショップからまちづくり活動へ～大阪市天王寺区みらいわがまち会議のまちづくり～（中塚一）
- 第2章：地域をよくしたい、必要とされたいという思いを束ねて～明石市地域福祉計画づくりの現場から～（大河内雅司）
- 第3章：地域とともにある保育園づくりをめざして～西宮市東山台地区の取り組み～（坂井信行）
- 第4章：中小企業家こそ地域力再生の主役～私たちの夢は「世

界一の試作産業集積地」をつくること～（高野隆嗣）

第5章：企業と力をあわせて地域を動かす～けいはんな学研都市「科学のまちの子どもたち」プロジェクト～（高田剛司）

第6章：農村地域における「地域再生の大実験」～兵庫県神河町の三九集落の取り組み～（原田弘之）

第7章：地域の知恵と情報と情熱を結びつける～「大阪湾見守りネット」が取り組む大阪湾の環境再生～（松岡浩史・杉原五郎）

終章：地域を動かし、地域を元気にする力～地域力発揮の視点～（杉原五郎）

7つのまちづくり実践報告には、住民、自治体関係者、中小企業経営者、学校や保育園の関係者、まちづくりコンサルタントなどが地域の現場でまちづくりと格闘している生々しい物語（ドラマ）が語られています。ぜひ一読の上、何かを感じ取って、地域を元気にするまちづくりの一助にいただければ幸いです。



MEDIA WATCH

「イノベーションの達人！」
発想する会社をつくる10の人材
著者／トム・ケリー&ジョナサン・リットマン
発行／早川書房

先駆者たちは何を見たか～熱狂が生まれる瞬間～

今年1月23日に大阪大学産業連携推進本部が主催された上記テーマの第2回イノベーションフォーラムに、アメリカを代表するデザイン・ファームであるIDEOのジェネラルマネージャー、トム・ケリー氏が来阪されました。IDEOの仕事については、アップルやパーム等、数多くの企業の製品開発で、皆さんも実際のデザインを目にされていると思います。また、その斬新なアイデアを生み出し、具体的な形にしていく方法については、2002年発刊の「発想する会社！」で紹介され、数多くの企業やチームが刺激を受け、啓発されました。私もその1人で、「イノベーションは見ること（人間観察）から始まる」や「究極のブレインストーミング」、「クールな企業にはホットなグループが必要だ」等の刺激的な問いかけに、当時、チームで創造的な仕事をするをを試行錯誤していた（今も暗中模索していますが）私たちに新しい視野を与えてくれました。

イノベーションはチームプレーだ

さて、新刊の本書ですが、前作がどうしてもIDEOの多くのプロジェクトがプロダクトデザインが最終のアウトプットであるため、デザイン系組織におけるイノベーションの方法という側面が強かったのに対して、新作では、様々な産業、企業、組織におけるイノベーションがチームプレーによって創造されることを提起しています。つまり「必要なのは1人の天才ではなく、継続することができる企業文化を支えるあなたのまわりの10人」であると。

あまのじやく 天邪鬼に負けるな

企業やプロジェクトにおいて、多くの新しいアイデアやコンセプト、プランが出てきても、それが花開く前に、「悪いけど、あえて反論させてもらえるかな」という致命的な一言をはさむ



紹介者／大阪事務所 中塚一

＜天邪鬼＞。天邪鬼が消え去ることはないかもしれないが、うまくいけば、10個のキャラクターが天邪鬼を黙らせてくれるだろうと、実際の現場から

の視点でその柔軟な組織論・人材論が展開されています。（「それでもだめなら、くたばれとも言えばいい」とも言っていますが）

「デジャヴ」ではなく「ヴュジャデ」

例えば、人間の微妙な振る舞いを観察することで新しいチャンスを発見する「人類学者のキャラクター」では、デジャヴ（既見感、フランス語：一度も経験したことがないのに、すでにどこかで経験したことがあるように感じること。）ではなく、前に実際に見たことがあるものを、いま初めて見ているような感覚（ヴュジャデ、造語）でものを観察することの重要性を指摘しています。

チームで創造する

「イノベーションは一人では起こせない。だが、適切なチームが組めていれば、いつでも課題に挑戦できる。」と、イノベーションが組織を再生させる手法に留まらず、楽しく、爽快に、しかも組織や社会に効果がある創造的な生き方が提案されており、ホットなチームづくりに向けて勇気をくれる1冊です。

■10の人材（キャラクター）とは

情報収集をするキャラクター

1. 人類学者：観察する人
 2. 実験者：プロトタイプを作成し改善点を見つける人
 3. 花粉の運び手：異なる分野の要素を導入する人
 4. ハードル選手：障害物を乗り越える人
 5. コラボレーター：横断的な解決策を生み出す人
 6. 監督：人材を集め、調整する人
- イノベーションを実現するキャラクター
7. 経験デザイナー：説得力のある顧客体験を提供する人
 8. 舞台装置家：最高の環境を整える人
 9. 介護人：理想的なサービスを提供する人
 10. 語り部：ブランドを培う人



街かど Café で、「ゆったり、読書。」

大阪事務所／中塚 一

「街なかの心地よい場所は、どこだろう？」

子どもとキャッチボールをする近くの公園、親父さんとカウンター越しに無駄話をする居酒屋、散歩がてら覗く雑貨店やギャラリー、音楽が気軽に聴けるCDショップ、いい事があった時に家族や同僚と行く焼肉屋、何時間も居られる古びた喫茶店などなど。結局、人それぞれに、思い思いに、気軽に過ごせる自分の居場所が「心地よい場所」なんだと思います。

さて、伊丹市では、春の全国子ども読書週間に合わせて、いつでも・どこでも・だれもが本に親しめる環境づくりを目指した「伊丹・本の杜」の一環として、去る4月29日に街なかの三軒寺前広場で、街かどCaféが開催されました。「押し付けがましくなく、青空の下のゆったりとした場所で、読書を楽しむことが出来ないか」をテーマに、地元神社の宮前祭りに合わせて開催されたイベントでは、祭りやCaféや買い物の次いでに、子どもから大人までが気軽に本を楽しむ姿がありました。

参加者アンケートの自由意見欄で頂いた「普段、本を読まない子どもが、ジュースを飲みながら本を読んでいる姿をみて感動した(40歳代 男性)」や「お天気に恵まれて、ゆっくり本が読めました(60歳代 女性)」、「青空の下で本が読める。こんな贅沢なことが出来るなんて。しかも無料!(40歳代 女性)」、「バスでお出かけ気分があり、飲み物もあり、子ども達と本が読め、すばらしいイベントでした(40歳代 女性)」「お父さんはなかなか図書館に行く機会がなかったので良かった(30歳代 女性)」等の意見が今回のイベントを物語っていて印象的です。

どの街にも、既に「空間」はあります。後は、

どのように色々な人が集まって、思い思いの時間を過ごせる「自分の居場所」にしていくのかが今、問われています。

今回、Caféと同時に、伊丹ゆかりの作家コーナー(田辺聖子氏、宮本輝氏、大谷昇一氏等)や昆虫館・こども文化科学館等の選書コーナー、図書館BookEco(ブッケコ)大会、缶バッチプレゼント(何と1,000個以上配布!)、人形劇・腹話術・かぶとづくり等のプログラムが展開されたのは、様々なボランティア団体の積極的な参画と市役所各部署の横連携を担当された事務局の方々の努力の賜物と考えています。



街なかで子どもと読む絵本の楽しさ



大人が読書する姿ってカッコイイ

アルパック(株)地域計画建築研究所

<http://www.arpak.co.jp> E-mail info@arpak.co.jp

本 社

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入立売西町 82
大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70 住友生命 OBP プラザビル 15F
名古屋事務所 〒460-0003 名古屋市中区錦 1-19-24 名古屋第一ビル 6F
東京事務所 〒160-0001 東京都新宿区片町 1-20 萩原ビル 3F
九州事務所 (株)よかネット 〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町 3-8 福岡パールビル 8F

TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764
TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478
TEL(052)202-1411 FAX(052)220-3760
TEL(03)3226-9133 FAX(03)3226-9560
TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128